非類似の他者に対する態度

——個人差についての予備的検討——

教育心理学コース　宇留田　麗

Attitudes Toward Dissimilar Othres
—A Preliminary Investigation on Individual Difference—

Urara URUTA

This study proposes a two－dimensional model to explain individual difference of attitudes toward dissimilar others. One dimension is empathy and the other is individuality. 276 university students were classified into four types by their levels (high / low) of empathy and individuality. Then 10 of them were selected and interviewed about their cognition, emotion and behavior toward dissimilar others. It was found that attitudes of each type were different as I had expected in the model. A developmental model for the transition of attitude is also presented.

目　次

Ⅰ．問題と目的
　A．非類似の他者に対する態度の個人差研究
　B．本研究における個人差の枠組み：共感性と個別性
　C．本研究の目的
Ⅱ．方法
　A．調査対象
　B．調査手続き
Ⅲ．結果と考察
　A．各類型の特徴
　　1．LL 型
　　2．LH 型
　　3．HL 型
　　4．HH 型
　B．類型間の比較分析
　C．態度の発達的移行についての仮説モデル
Ⅳ．まとめ・今後の課題

Ⅰ．問題と目的

A．非類似の他者に対する態度の個人差研究

従来，他者との態度の類似性と魅力の関係については，「他者に対して感じる魅力は，自他の態度の類似性の比率に比例して高まる」という「類似性一魅力仮説」(Byrne 1971）が広く知られてきた。人はなぜ自分と態度の類似した人を好むのか。この仮説では，効力動機(effectance motive）の低減説（Byrne & Clore，1967）という理論によって説明している。すなわち，人は，環境との相互作用の中で，環境を整合的に，正確に認知しようとする動機（効力動機）を持つ。この動機は，自分が熟知していない状況や事態に直面した時に喚起される。もし，ある他者の態度が自分と類似していれば，自分の態度の妥当性が確認されたことになり，効力動機が低減され，快的な情動が生じる。この情動が相手に結びつくことにより，類似他者への評価は好意的になる。一方，非類似の態度を表明する他者に対しては効力動機が充足されず，不快な感情が生じるので，非類似の他者は好まれないという。

類似性一魅力仮説を支持する研究は続々と登場し，他者への態度がその他者と自分の態度の類似性に規定されることは繰り返し実証されてきた。しかし，全ての人が同じ類似度の人を同じ程度に好むわけではなく，この類似性と魅力の関係には個人差があることも示されている(Byrne 1971)。本研究が注目したいのは，この個人差の部分である。特に，筆者は，非類似の他者に対する態度には個人差があることを，日常生活においても強く感じていた。そして，自分とは異質な他者に対して寛容であ

る人というのはどのような特性を有しているのかを探ることは，教育現場でのいじめのような，異質なものへの攻撃から生じる問題への対処を考える際にも，臨床場面において患者が自分とは異質な他者と共存できるようになる方法を考える上においても，有効ではないかと考えた。このような側面からも，非類似の他者への態度の個人差研究には意義があると思われる。

しかし，これまで，類似性―魅力関係における個人差については，研究も少なく，誤差要因として扱われがちな部分であった。Byrne (1971) や Wiener (1970) のレビューによると，初期の個人差研究では，権威主義的パーソナリティ，不安，独善性，認知的複雑さ，承認欲求，社会的望ましさ，抑うつ，テスト不安，親和欲求などがパーソナリティ要因として取り上げられ，類似性―魅力関係との関連が検討された。これらの特性のうち，親和欲求を取り上げた Byrne (1962) は，中程度の親和欲求を持つ群が，他のレベルの群に比べ類似した他者をより好み，非類似の他者をより嫌う傾向が強いことを示した。しかし，親和欲求以外の特性は，いずれも有効な個人差要因とはなりえなかった。ただし，この初期の研究で最も有効な要因とされた親和欲求についても，最近の追試では (Shaik & Kanekar, 1993)，親和欲求のレベルによって魅力の差を見いだすことができず，Byrne の主張に反する結果を得ている。

その後，類似性―魅力関係の個人差研究はあまりなされていないが，比較的新しい研究では，ある種の自尊心や共感性，親和欲求との関連が検討されている。奥田 (1989) は，自尊心を多次元的にとらえ，自尊心の下位概念の中で「考えを積極的に言う」などの「積極性」因子の得点が高い群は，積極性得点が低い群よりも，非類似の他者に対して魅力を高く評定することを示した。共感性との関連については，Grover & Brockner (1989) が，共感性の高い群は低い群よりも，類似他者への評価が高いことを示した。これらの 2 変数は類似性―魅力関係の個人差を説明する変数として，それなりに有効な特性であろう。

この他には，中村 (1988) が，「寛容的対人態度」という概念を提唱し，非類似の他者への魅力との関連をみている。中村は，この研究で「非類似の他者全般を容認する」という寛容的対人態度が高い群が，低い群よりも，非類似他者との相互作用をより望むという，ある意味では当たり前の結果を得ている。しかし，中村は加えて，この寛容的対人態度という特性が，他のどのようなパーソナリティ変数と関連するのかを探っており，自尊感情のうちの「独立性・積極性」と .28という弱い正の相関があることを見いだしている。

これらの特性と個人差の理論的な関連としては，中村や奥田は，自尊心（独立性・積極性）の高低が，非類似他者に対する効力動機の喚起のされやすさに関連している可能性を指摘している。一方，Grover らは，共感性を「他者の視点を取得する能力」と定義し，共感性が高い人は類似他者の意見をより自分にひきつけて理解することが可能であり，それが類似他者へのより高い好意をもたらしているのではないかと指摘している。

以上のように，最近の先行研究からは，共感性という「他者との理解や他者との関わり」に関する要因と，ある種の自尊心（独立性）といった「自他の分離」に関する要因という，2 つの異なる要因が，それぞれ類似他者・非類似他者への魅力の個人差要因となりうることが示唆されている。しかし，自尊心（独立性・積極性）については，個人差をもたらした「寛容的対人態度」と弱い関連が見られたのみであり，個人差要因としての有効性は不明である。また，どちらの研究も，類似他者・非類似他者への態度を部分的に説明しているのみであり，統合的に説明する観点を提出していないのが現状である。

これは，いずれか単独の軸のみとの関連では，類似性―魅力関係における個人差の説明は困難であることを示しているのではないか。例えば，「他者との分離・独立」の認識が高いほど，相手の非類似性に接した際の効力動機が喚起されにくく，否定的な態度をとりにくいという仮説を立てたとする。しかし，そこで単に分離の意識の高低という基準だけで個人を分類すると，元々他者への関係を持ちにくく孤立的で，対人態度全般が否定的・消極的な人もそこに含まれてしまって，分離意識のレベルでは態度の差が見いだせなくなるという可能性があるだろう。また，「他者との関わり」についての欲求や認識が高いことが他者への態度評定に差をもたらすという仮説のもとに，親和欲求や共感性の高低で個人を分類すると，自他の分離を自覚せずに他者との関係を持とうとする人々も高群に含まれることになり，このような人々は，類似の他者に対しては低群よりも好意的な態度を示すかもしれないが，非類似の他者に対しては効力動機を喚起され，否定的な態度を示すことになり，非類似の他者への態度は低群と差がみられないことになるだろう。

以上の考察から，本研究では，非類似の他者への態度の個人差を，「他者との関わりの次元」と「他者との分離の次元」の 2 つの次元の組合せによって説明することを試みる。

ここで，本研究では，従来の対人魅力研究が主に用いてきた Byrne による “attraction paradigm” (Byrne

1971）のように，実験者が操作的に作成した架空の未知の非類似人物に対する態度を扱うのではなく，被験者が現実場面において実際に関係のある人物に対する態度を見て行きたい。従来の研究において，類似性—魅力関係における個人差が見出されにくかった理由のひとつに，未知の人物に対する態度を扱ってきたというパラダイムの要因があるのではないかと考えるためである。この実験的パラダイムによって類似性—魅力関係の個人差を扱うことについて，Shaik と Kanekar（1993）は，このような実験パラダイムでは，類似性の効果が非常に大きいため，個人差を見出しにくいことを指摘している。加えて，非類似の他者への態度の個人差は，現実に相手と関係を持った時点でより顕著になるという可能性もあるのではないだろうか。こうした観点から，本研究では現実に関係のある他者への態度と個人特性との関連を探索的に見て行くこととする。

さらに，本研究においてもうひとつ考慮したい点に，態度のとらえ方がある。従来，態度は，「行動の準備状態」と定義され，態度対象に対する認知・情動・行動傾向の三要素から成り立つとされてきた（Olson & Zanna, 1993）。とはいえ，非類似他者への態度を扱ってきた従来の対人魅力研究では，対象への「情動」が重視されてきており，認知や行動傾向の側面は扱われることが少なかった。これは，他者への態度の中心は情動にあり，情動が最も行動と密な関係を持つという知見に立ってのものであろう（Byrne, 1992）。しかし，対人魅力研究において，数は少ないながらも，魅力を多次元的にとらえたものがあり，（中村，1988，奥田，1989）。これらの研究は，非類似の他者に対する態度において，寛容群と不寛容群間に情動レベルでは差は見られないが，行動傾向レベルでは差が認められたという，興味深い結果を示している。これらの研究からは，態度の3要素によって，個人差の見出だされやすさが異なる可能性，他の特性との関連を見る際に，関連が見られる部分と見られない部分がある可能性が示唆されていると考えられる。

そこで本研究では，非類似の他者への態度を，認知・情動・行動傾向の3つのレベルに区分して独立に扱うことで，態度の構造や，個人特性が態度のどの要素に特に関連するのか（あるいは要素間に差が見られないのか）を探索的に見ていくことにする。

B．本研究における個人差の枠組：共感性と個別性

本研究では，「他者との関わり」の次元に相当する個人特性として「共感性」を，「他者との分離」の次元に相当する個人特性として「個別性」を取り上げ，非類似の他者への態度の個人差を見るための枠組みとする。

共感性・個別性という概念は，落合（1989）による，青年期の孤独感の構造についての研究の中で提唱された概念を参考にしている。落合は，この共感性・個別性という2つの次元の高低の組み合わせによって青年期の孤独感の類型化を行い，孤独感の意味あいや基本的な対人態度が各類型によって異なることを示した。また，多くの青年は個別性の高まりとともに孤独感類型が共感性高・個別性低群から共感性・個別性ともに高い群へと発達的に移行することも示しており，この枠組みはひとつの青年期の発達モデルとしても有効であることが示されている。

本研究では，落合の研究を参考にしつつ，これらの2つの概念を改めて，「共感性：人間は互いに理解・共感が可能であるという信念」，「個別性：人間はひとりひとり分離・独立し，個別性を持つ存在であるという信念」，と独自に定義し，これらの「人のあり方についての信念」の2次元の組合せと非類似他者への態度の個人差との関連を見ていく。

では，これらの「共感性」「個別性」という信念は非類似の他者への態度とどのように関連してくるのだろうか。共感性は，他者との理解可能性についての信念であり，他者と関係を持つこと自体の可能性をどのようにとらえているかという点から，基本的な他者への態度が肯定的であるか否かに関連するのではないかと仮定される。そして，個別性は，人がお互いに個別の生き方をしているということの自覚であり，他者との分離に関する信念であることから，効力動機の喚起されやすさに関連すると仮定される。

以上のような理論的背景から，共感性・個別性の2次元の高低の組合せによって対象を4つの類型に分類し，それぞれの基本的な対人態度と，非類似他者への態度を予測すると，以下のような仮説が得られる。（各類型の名称は，共感性・個別性の高低によって「LL型」「LH型」「HL型」「HH型」とする。）

LL（共感性・低，個別性・低）型：自他の個別性についても，共感可能性についても認識が低い。自他の関係について漠然とした認識しかないということは，他者との関係自体が薄いということを示しているだろう。非類似他者に対しては，個別性が低いという点からは，効力動機が喚起されやすいため，否定的な態度をとることが予測される。しかし同時にもともと他者への関心が低いため，これらの共感性の低さと個別性の低さの相互作用が，どのような態度をもたらすのかは，予測が困難な部分である。いずれにしても，肯定的な態度を示すことは

ないことが予測されるが，否定的な態度がどのような形で表れるのかは結果を待ちたい。

LH（共感性・低，個別性・高）型：共感性が低く，個別性の高いLH型は，人が互いに個別性を有するという認識が，人は別々であるゆえに分かり合うことはできないという対人態度につながっている。そこから，他者に対しては全般的に「無関心」「関わりを持たない」という否定的・消極的な態度を持つことが予測される。非類似の他者に対しては個別性が高く効力動機の喚起が低いため，否定的な態度にはならないが，「無関心」という形の消極的な態度（「否定的ではない」という意味で，消極的な寛容な態度とも言える）を示すことが予測される。

HL（共感性・高，個別性・低）型：共感性が高く個別性の低いHL型は，人と自分は個別の考えや生き方を持つ存在だという認識が薄い状態で，お互いに理解・共感できると信じている。すなわち，自他の分化が曖昧な状態で，人はお互いに全て理解しあうことができると信じる，自他融合的な対人態度を有していると言える。ここから，理解不可能な非類似他者に対しては効力動機が喚起されやすく，否定的な態度を示すことが予測される。

HH（共感性・高，個別性・高）型：共感性・個別性がともに高いHH型は，人の個別性をふまえた上でお互いに共感可能と信じている。すなわち，人は互いに独立し，それぞれが固有の生き方をしていることを認識した上で，互いの違いをこえて理解できる部分もあるという信念を持っている。個別性が高いことで非類似他者への効力動機の喚起が抑制され，共感性が高く基本的な対人態度が肯定的であることと合わせて，非類似他者に対して他の類型よりも相対的に肯定的で寛容な態度を持つことが予測される。

C．本研究の目的

本研究の目的は，共感性・個別性という個人特性によって，現実に関係のある非類似の他者への態度の個人差を説明できるかどうかを探ることである。この目的のために，本研究では面接法を用いて，共感性・個別性の高低の組合せによる4類型（LL型・LH型・HL型・HH型）について，それぞれ現実に関係のある非類似他者に対する態度を収集・記述し，各類型がどのような態度を示しているか，理論的に予測された態度と整合するものであるかを見ていきたい。面接法をとることは，①現実場面での相手との関係性について，時間的な経過も含めて詳細にデータをとること，②現実場面での複雑に交絡した要因をひとつひとつ確認していくこと，③各類型間の態度の質的な差異（肯定―否定という一次元では見いだせない差異）を見いだすことを可能にし，両特性と個人差の関連を探索するという本研究の目的に適合する方法であると思われる。

II．方法

A．調査対象

本研究の定義する「共感性」・「個別性」概念を測定するために，落合（1989）による孤独感尺度を参考に，独自に「共感性・個別性尺度」を作成した（宇留田　1998）。項目をTable 1に示す。これを首都圏の大学生279名（男性：39名，女性：240名）に実施し，両尺度の得点に基づいて，各類型に分類される被験者をリストアップした。尺度はいずれも6件法で，平均値は共感性：4.40（標準偏差0.6），個別性：4.39（標準偏差0.6）であった。いずれかの尺度得点が平均点から4分の1標準偏差以内の被験者を除き，その他の被験者を4類型に分類した。各類型の人数は，LL型30名，LH型32名，HL型37名，HH型27名であった。そのうち，面接調査の協力依頼に応じた被験者を各類型から1～3名ずつ（LL型1名，LH型3名，HL型3名，HH型3名），合計10名を選択した。年齢は19～22歳であり，性別の内訳は男性3名，女性7名であった。

各被験者の簡単なプロフィールはTable 2を参照されたい。「面接調査の協力依頼に応じた人」という制約がつくため，完全に理論的なサンプリングを行なうことは困難であったが，可能な限り共感性・個別性得点が各類型の典型例となりるように配慮した。LL型については，面接への協力依頼に応じてくれた人がそもそも少なく，依頼を了承してくれたのが1名であったため，他の類型よりも数が少なくなってしまったという経緯がある。これは，LL型の予測される対人態度（自他のあり方についての認識が薄く他者と関係をもつこと自体に消極的・否定的である）を考慮すると，納得できる面もあると思われる。

B．調査手続き

調査時期は，1997年11月下旬～12月初旬。1対1の半構造的な個人面接法を用いた。面接の行なわれた場所は，筆者の所属する大学の実験室であった。面接に所用した時間は，1～2時間程度で，内容はテープレコーダーで記録した。

インタビューでの質問内容を，Table 3に示す。基本的に，まず現実に関係のある非類似の他者を具体的に1名あげてもらい，①相手との関係，②非類似と感じた出

Table 1. 共感性・個別性尺度の項目

共感性項目
①人間は，他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができる
②私の考えや感じを何人かの人は分かってくれるだろう
③人間は，互いに相手の気持ちをわかりあえる
④他人の生き方を理解することはできない*
⑤私の生き方を誰も分かってくれはしないだろう*
⑥私は，私の生き方を誰かが理解してくれると信じている
⑦他の人の考えや感じを理解することは可能である
⑧私の考えや感じを誰もわかってくれはしないだろう*

個別性項目
①人はひとりひとり別々の人生を歩んでいると感じることがよくある
②苦しんでいる人がいても，その人に代わることはできない
③どんなに親しい人どうしでも，全く同じ価値観を持っているということはない
④お互いの全てを分かり合えなければ，愛し合っていることにはならない*
⑤どんなに親しい人も，自分とは別個の人間である
⑥私の悩みに対して，いつも私の望む答えを示してくれる人がきっといる*
⑦自分は自分らしく生きるしかないのだと思って生きている

注：*を付した項目は，逆転項目である。

Table 2. 被面接者のプロフィール

被面接者	性別	年齢	類型	共感性得点	個別性得点	専攻
C	F	20	LL	3.63	4.14	心理学
D	M	19	LH	2.88	5.83	心理学
E	F	19	LH	3.88	5.00	栄養学
F	F	19	LH	3.75	4.86	心理学
G	F	20	HL	5.25	3.29	英文学
I	M	19	HL	4.88	3.14	心理学
J	F	22	HL	4.75	4.00	心理学
K	M	20	HH	4.75	5.28	心理学
L	F	19	HH	5.25	5.29	心理学
M	F	19	HH	4.75	5.00	心理学

来事，③相手についての認知，④情動，⑤行動傾向，⑥相手が自分をどのように見ていると思うか，を相手との関係性をより明らかにするための質問を適宜はさみながら，語ってもらった。データの分析については，まずは各類型ごとに非類似の他者への態度の事例の特徴をまとめ，さらに，各類型間でそれぞれの特徴を比較する，比較分析（Glaser & Strauss, 1967）を行なう。また，質的データの解釈の妥当性を保つために，質的研究法について知識を有する大学院生4名に，共感性・個別性の定義と2次元の枠組みを説明した上で，各事例の詳細なプロトコルと解釈に目を通してもらった。そして，筆者の解釈に恣意性がないか，他により良い解釈の可能性がな

Table 3.　面接の質問項目

＊＊さんには，「自分とこの人は意見が違うな」とか「この人の考えは自分と似ていないな」と感じる人はいますか？　具体的に１人思い浮かべてください。

1.　その人は，どのような関係の人ですか？
2.　どのようなところが違う・似ていないと感じられますか？
　　どのような時にそれを感じましたか？　具体的なエピソードを挙げてください。
3.　その人は＊＊さんから見てどんな人ですか？（認知）
4.　その人に対してどんな気持ちを持ちますか？　好きですか？　嫌いですか？
　　その人と接しているときの＊＊さんはどんな状態で，どんな気持ちですか？
　　それは，どうしてでしょう？（情動）
5.　その人とは，どんな付き合いをしていますか？　これからは，どのようにつきあっていきたいですか？　それはなぜでしょう？（行動傾向）
6.　相手の人は＊＊さんのことをどう思っていると思いますか？
　　どうしてそのように思いますか？

いかどうかを検討してもらい，彼らの意見を取り入れることで，考察に間主観性を保つための手段とした。

III．結果と考察

まず，各類型の個々の事例を提示した後，類型ごとの特徴を抽出する。それを４つの類型について行なった後，類型間の比較分析を行なう。

A．各類型の特徴

各事例の内容について Table 4 にまとめた。これを踏まえつつ，各類型の特徴を抽出してみたい。

1.　LL 型

LL 型は，全般的に他者への態度が消極的・否定的であることが予測されたが，特に非類似の他者に対しては，個別性が低いために効力動機の喚起がなされやすい一方，共感性も低く，もともとの他者への関心や関係を持とうとする姿勢も消極的であることが予測され，その相互作用の結果がどのようになるかは予測が困難な部分であった。

事例を見ると，相手への態度は，「意見を断定するかしないか」という問題のＣさんにとっての重要さを考慮に入れても，やはり非常に否定的であり，「人を蹴落とそうとする」「冷たい」などの否定的な認知，「怖い」という強い否定的な情動が喚起されている。

また，相手と自分の非類似度を「とにかく全てが違う」と高く認知していることも特徴的であった。この，相手と自分の非類似度を高く認知するということは，共感性が低く，基本的に他者との関係が希薄であることから他者と自分に共通点を見いだしにくいということと，「相手は相手，自分は自分」という個別性の認識が低いために，効力動機が喚起されやすいことの相互作用の結果として生じる，LL 型に特徴的な現象であると思われる。

これらの結果を総じて，LL 型の非類似他者への態度は否定的であり，相手との非類似度を高く認知する傾向があることが指摘できる。

2.　LH 型

LH 型は，個別性が高いことで他者への効力動機の喚起が低いことが予測される反面，他者と関わることへの動機づけも低いため，非類似の他者に対しては，特に肯定的でも否定的でもない，無関心で消極的な態度を示すことが予測されていた。Ｄさんの事例においては，相手との関係自体が希薄で相手への関心が低いため，特に否定的な情動を喚起されることがなく，行動面でも「つかず離れず」距離をとるという典型的な LH 型の態度が示された。Ｄさんの，人と親しくつきあうことについて「疲れる」「束縛される」と否定的である点や，相手への認知や自分との非類似点が曖昧であるという点も，他者への無関心と接触の少なさの現われと考えることが可能であり，LH 型の特徴であると思われる。

しかし，他の２名，ＥさんとＦさんの非類似他者への態度は，異なる様相を呈している。Ｅさん・Ｆさんは，相手の非類似の点に対して，認知的には肯定的であったり（Ｆさん），個別性を認めている（「１人でいるのはいいと思う」：Ｅさん）が，情動レベルでは否定的な情動を強く喚起されている。また，他者との関わりについて「グループに対して与えること」を重視していたり（Ｅさん），「分かって欲しい」（Ｆさん）と，積極的であるという点

Table 4. 各事例の語り

類型	名前	似ていないと感じる相手	似ていないと感じた事柄	相手に対する認知	相手に対する情動	相手に対する行動傾向	相手からの認知
LL	C	大学の同級生。授業が同じなので，一緒にいることが多い。	「自分がこうあらねば」というのが確立している。意見を断定するところ。	模範的な人。自分さえよければいいと思っている。冷たい。人を蹴落とそうとする。自分とは全てが違う。	好きでも嫌いでもない。なんかわからない。怖い。	あまり会わない。個人的なことは話さない。今は授業では一緒にいるけれど，卒業したら連絡とらないと思う。	(自分のことを)変わっていると思ってるのでは。服も全然違うし。(好かれているのかどうか) わからない。
LH	D	いない。友達がいない。普段接触のある人自体がほとんどいない。(強いてあげると)高校時代の同級生。	外見。イメージ。(遊びに行く場所などに)こだわりがあるところ。よくわからない。	移り気。奇妙な人。常にアンバランスで，読めそうで読めない。つかみどころがない。	好き・嫌いはあまり感じない。普通。(一緒にいるときは)自分は普段どおりにしている。	つかず離れず。必要があれば会う。数ヶ月に一度くらい。個人的な話はしない。親しすぎると疲れる。束縛されたくない。	むこうも自分のことを「変」「つかみどころがない」と思っていると思う。
	E	大学の同級生。なんとなく一緒に行動している6人グループの1人。	集団より1人を好むところ。お弁当を1人で食べたり，一緒に帰らないで1人で勉強していたりするところ。	自分から周りに何も与えない人。1人でいることについては，そういうところがあってもいいとは思うが。	都合の良い時だけグループに入ってきて，ずるい。	個人的なことは話さない。グループの他の子は気にかけてるけど，こっちから話し掛けたり，媚びるようなことはしなくていいと思う。	どうでもいい。
	F	同じ大学の同級生。クラスで一緒にいる4人グループの1人。お互い実家が大学から遠かったので，4月から同居中。	正論でものを考えるところ。頑張るところ。異性に対して素直なところ。	頑張って自分を変えて行こうとするすごい人。正直。	好きだけれど，意見が合わないときは嫌。違う意見の人がいてもいいと分かっているが，やっぱり分かって欲しいので辛い。	同居しているので，一緒に食事を作ったりしている。個人的な悩みなども話す。このまま普通にいくんじゃないかと思う。	考えたことないので，わからない。嫌いではないと思う。どちらかというと好きな方に入っているんじゃないか。
HL	G	大学で同じクラスの友達。仲のいい3人グループの1人。	授業に絶対に遅刻しないで出るところ。はっきりしないで曖昧なところ。男の子と遊ばないこと。	きっちりしている。おもしろい。真面目。意見をはっきり言わない人。	はっきり言わないのでムカムカしたりイライラすることもある。話題を選んだり，気を遣ってしまう。	大学の行き帰りを一緒にしている。もうグループができているので，これからも仲良くしたい。1人でいると，周りに変な目で見られて嫌。	(自分が授業に遅れた時などには) 自分に対して怒っているのではないかと思ってしまう。
	I	大学で同じ学科の人。	人のマイナスの点もはっきり言う。結果を重視していて，途中の努力を認めないところ。	悪く言えば，思いやりがない人。はっきり言うので，人を傷付けるところがある。それ以外は性格は良い (野球の話とか，自分と共通の話題があるので良い人)。	思いやりがないと感じることもある。まあ，好き。話が合って面白い，楽しいこともある。	卒業してもたまには会いたい。貴重な友達なので。自分と違う意見の人が親しい間柄にいるというのは，貴重なことだと思うので。	結構話題とか合うし，たまに電話とかあるし，わりと仲良いんじゃないか。
	J	大学の同じ学科で，サークルも同じ同級生。	強引なところ。嫌なことは嫌とはっきり言うところ。	強い人。強引というか，自己主張がはっきりしている。	怖い。意見を反対されたり，かならず何かを主張したりするので。苦手。	たまにサークル関係のことを話すくらい。これからも同じ学科で仲良くいたい。	同じ学科の普通の友達と思っているのでは。
HH	K	大学の同級生。	他の人が会話している途中に，別の話題を始めるところ。自分の価値観でしか話をしない。嫌いなものには見向きもしないところ。	反面教師。自分と違う面白い人。ユニーク。	そういう人と割り切っているので，あまり嫌とは感じない。相手の反応を見るのが面白い。(一緒にいる時の自分は) 普通。	授業や食事を一緒にとることもある。相手からは個人的な相談を受けたりしているが，こちらはしない。今後もこのままの関係だと思う。避ける必要もないし，良い距離。	結構 (相手を) からかっているので，調子がいいやつと思われているかな。好きとか嫌いとかは特にないと思う。
	L	高校時代の友人。部活動(バスケットボール) が一緒だった。	悩んでいる友達に対して，一方的なアドバイスをしていたこと (自分なら，その子の気持ち考えて，もっとよく話を聞くと思う)。	しっかりしている。責任感が強い。プラス思考。	頼れるし，好き。違慮がいらない。	一緒に旅行に行ったり，2人で会って話すことも月に一度くらいはある。個人的なことも話す。今後も，いままでみたいに時々会って，話をしたい。	マイペースな人と思われているんじゃないかな。嫌われてはいないと思います。
	M	大学の同じ学科の人。授業が同じでよく一緒に行動する3人グループの1人。	友人関係のことなど，他人のことを細かく色々と気にして，すぐ悩むこと。	真面目に考えてしまう子。根本的に自分とは違う。よく分からない人。人それぞれなので，良いところでもあるが。	一緒にいると疲れる。話をつながなきゃと思って疲れてしまう。悩まなければ好き。	授業や昼食のときに一緒にいる。価値観が違うので，相談相手にはならない。ゼミが別れたらもう会わないと思う。	結構いい加減な人と (思われてる)。物事をパッとやっちゃう人だと。

も，LH 型の態度として予測されたものとは異なっており，むしろ HL 型の態度として予測されたものに近いように見える。しかし，他者に求める関係の深さなど，後述する HL 型の特徴とは異なる点もある。それでは，これらの事例はどのように扱うことがよいのだろうか。筆者は，これらの事例については，青年期における「態度の発達的移行」を考慮して見ることによって妥当な説明が可能であると考られえる。そこで，Eさん・Fさんの事例については，「移行型」として，改めてその特徴や移行型の設定の必要性・移行過程のモデルについての考察と合わせて後述したい。

3．HL 型

非類似の他者に対しては，個別性の低い HL 型は，相手への効力動機が喚起されやすく，否定的な態度をとることが予測された。ただし，他者との関係をもつこと自体には肯定的であるため，それらの相互作用の結果，否定的な態度がどのような形で表れるかは不明な部分であった。事例をみると，G・F・Iのいずれの事例においても，相手への認知面では，相手の肯定的な面と否定的な面を同時に言及している。行動の上では，「同じグループやクラスで」共に行動することが多い。3事例ともつきあいの内容は表面的であるが，相手との関係を「仲がいい」と認知しており，「今後も仲よくしたい」と思っているのが特徴的である。反面，情動面では，自分とは異なる面に触れると，「いらいら・むかむか」（Gさん）したり，「思いやりがない」（Iさん）「とにかく怖い」（Jさん）と，否定的な情動を強く喚起されていることが報告されている。

このように，HL 型の非類似の他者への態度は，行動傾向面では表面的に関係を保ちつつも，認知面・情動面ではアンビバレントな態度を経験しているという，3要素間にギャップがあることが特徴であると言うことができるであろう。

4．HH 型

HH 型は，共感性が高く，もともとの対人関係を持つことへの態度が肯定的である上に，個別性が高く，自他が分離している程度が高いことが加わり，非類似の他者に対して相対的に寛容であることが予測されていた。事例を見ると，Kさん，Lさんでは元々の相手との関係の深さが異なるという点はあるが，両者とも，自分にとってかなり重要な問題について異なる相手に対して，肯定的（Lさん）あるいは否定的ではない（Kさん）態度を示しており，理論的に考えられた態度と整合する記述が得られたと言うことができるだろう。

また，両者の非類似の他者への態度は，認知・情動・行動傾向が一貫して寛容であることが特徴的である。Lさんは，相手の否定的な部分を認知していても，肯定的な部分も見ることで総合的に認知・情動・行動とも肯定的な態度を形成している。Kさんは，相手の否定的な面に接しても「こういう人もいる」と割り切ることで情動面で否定的にならないようにし，認知面で「違うからおもしろい」と相手を肯定的にとらえ直し，行動面でも相手に否定的にならないようにつきあいを調節するということを行なっている。このように相手への態度を3要素間で一貫させる過程には，自他を分離させ，否定的な情動の喚起を抑制する個別性の信念と，関わりが可能であるという共感性の信念がともに作用しているように思われる。

Mさんについては，認知レベルでは相手の個別性を認めているが（「人それぞれなので良いところでもある」），情動レベルでは否定的な情動が喚起されていて態度の3要素間にギャップがあり，理論的に考えられた態度とは異なっている。この事例については HH 型とは区別し，前出のEさん・Fさんとともに「移行型」として後述したい。

B．類型間の比較分析

これまで，各類型ごとに特徴をまとめ，理論的な予測と対応させながら，非類似の他者への態度と共感性・個別性の関連を見てきた。ここからは，各類型間の比較を通して，非類似他者への態度と，共感性・個別性の関連を見ていきたい。

非類似の他者への態度は，「人は互いに分離・独立し，個別性を有する存在である」という個別性の信念の高い群が，自分とは異なる態度を示す他者に面した際の効力動機の喚起が相対的に低く，相手に対してより寛容な態度を示すことが予測されていた。各類型の態度を比較してみると，個別性の低い LL 型と HL 型は，ともに相手への否定的な情動が強く喚起されていることが示されている。それに対して，個別性の高い LH 型と HH 型は，自分とは異なる相手に対しても，さほど強い否定的な情動は喚起されていない。やはり個別性の高低は，効力動機の喚起と，それにともなう否定的な情動の喚起に影響を及ぼしているように思われる。

このように，非類似の他者への態度が否定的であるか否かは，大きくは個別性の高低によって分かれるように思われる。そこでさらに，共感性の高低も合わせてみることで，同じ「否定的な態度」であっても LL 型の態度と HL 型の態度の間には質的な違いがあること，「否定的でない態度」であっても LH 型の態度と HH 型の態度の間

には質的な違いがあることも指摘できる。

肯定的―否定的の軸では，同じ否定的な態度に分類されるLL型とHL型であるが，2つの点で違いが見られる。それは，LL型が認知・情動・行動傾向面とも一貫して否定的な態度を形成しているのに対し，HL型は，情動面では否定的情動が強いが，認知・行動傾向面では相手への評価はアンビバレントという，態度の3要素が未統合な形での否定的な態度を形成していることである。HL型は，情動面では否定的な情動を強く喚起されていても，相手との共行動を通じて，相手との関係を「仲がいい」と認識するという特徴がある。これは，共感性の高いHL型は，他者と関係を持つことへの動機づけが高いために，現実に関係のある他者に対して行動傾向等の表面に表れる態度は否定的になりにくいことを示していると考えることができるのではないだろうか。しかし，3要素が統合されていないため，非類似の他者への態度は不安定である。

次に，非類似他者に対して「否定的でない」態度を示す，LH型とHH型の態度を比較してみたい。LH型の非類似他者への態度は，相手への関心が低いことによってもたらされる，相手を「否定はしない」という形の消極的な寛容な態度である。また，他者との関係が希薄で，他者への関心が低いため，相手との非類似点を見出だすこと自体が困難であるということも見られる。一方，HH型の態度は，相手と自分の違いを明確に認識した上で，違いには批判的であっても，総合的には相手を認め，肯定的な関係を持っていこうとする積極的な寛容な態度である。

さらに，行動傾向面では一見同じように相手との関係を保っているように見られるHH型とHL型を比較してみると，HL型が非類似の他者に対して「同じグループ・クラスだから」という物理的な条件によってつきあっているのに対し，HH型は「その人との」固有の関係を肯定的にとらえてつきあっているという点に違いが見られる。また，HH型は総合的に相手への認知・情動・行動傾向が一貫していることも，3要素が未統合なHL型とは異なる点である。

以上のように，非類似他者への態度は，個別性の高低によって，相手への否定的な情動の喚起に大きな違いが見られた。さらに，類型間の比較により，共感性との組合せによる4類型間でも態度が質的に異なり，LL型は否定的，LH型は消極的寛容，HL型はアンビバレント，HH型は積極的寛容とまとめることができるように思われる。この結果は，非類似他者への態度の個人差を，共感性・個別性という個人特性との関連において説明することが可能であることを示していると言えよう。

C．態度の発達的移行についての仮説モデル

次に，各類型の特徴の抽出の際に，各類型の典型例とは異なる態度を示した3事例（LH型のEさん・Fさん，HH型のMさん）について，考察を加えたい。

落合（1989）は，青年期における共感性・個別性の発達的な変化について，共感性・個別性の組合せによる4類型を尺度の理論的な中央値で分類した際には，①青年期において多くの者がA型（HL）からD型（HH）へと移行すること，②B型（LL）・C型（LH）は典型例となることは少なく，一過性の型であることが多いことを示した。ただし，その移行の過程にどのような現象が生じるのかについては明確にされてはいない。

本研究では，共感性・個別性の尺度は異なるものを用い，高低の区分はその平均値を用いて行なっているため，落合の類型と本研究の類型を直接比較することはできない。しかし，同じ共感性・個別性という2つの軸の関連を見ているため，一般的に青年期において個別性の軸が発生し，その高まりにともなって多くがHL型からHH型へ移行すること，その過程で一時的にLL・LH型になる者がいる，という知見はそのまま当てはめることが可能であろう。

青年期の共感性・個別性の発達についてのこうした知見を踏まえ，本研究においても，非類似の他者への態度についてこのような発達的「移行期」を想定し，前記の3事例をHL型からHH型への「移行型」であると見なすことで，これらの事例の示した態度を説明することが可能になると思われる。

そこで，これらの事例について，その特徴をまとめ，移行期にあるとみなされる理由，なぜLH型・HH型に分類されたのかについて以下に考察する。さらにそこから，先行研究においては扱われてこなかった移行のプロセスについての仮説を得ることを試みる。

移行型と判断された3事例の基本的な対人態度の特徴を見てみると，3事例に共通しているのは，基本的に他者と関係を持つことへの動機づけが高く，相手を全面的に理解したい，理解されたいという自他融合的なHL型の対人態度を持っていることである。しかし，同時に，信念としては「人は互いに分離・独立し，個別性を有している」という個別性の認識も持っていることも指摘されている。このように，HL型的な自他融合的な側面と，個別性の信念が共存していることが移行型の特徴であると言える。

非類似の他者に対する態度は，LH型に分類された2

事例（Eさん・Fさん）では，信念のレベルでは相手の個別性を認められるが，情動面では「ずるい」「嫌だ」という否定的な情動が喚起されている。また，HH 型に分類されたMさんは，認知面ではアンビバレント，情動面では否定的，行動傾向面では「グループだから一緒にいる」と，態度の3要素間にギャップがあり，HL 型の非類似の他者への態度に近い。基本的に，3事例とも相手への否定的な情動が強く喚起されており，情動面では HL 型の非類似他者への態度に近いことが指摘できる。また，3事例のいずれにおいても認知面・情動面・行動傾向面にギャップがある。このギャップが，移行型の特徴であると見ることができるだろう。

しかし，移行型と HL 型の態度には，異なる点も存在する。それは，HL 型が共行動を重視し，相手の特性に触れない表層的な対人関係を持っているのに対し，移行型は相手個人を求めたより親密な深い対人関係を望んでいる点にある。彼らは個人的な話も進んで行ない，相手を他の人とは代替不可能な個人として求めており，こうした態度は HH 型の対人態度に近い。

対人態度は，実際の対人経験の中で形成されるものであり，かつ，対人態度が対人関係を変化させ，形作っていく面があるだろう。対人態度の移行は対人関係との相互作用の中で生じると考えられる。そして，先に指摘されたような移行型の認知面・情動面・行動傾向面にギャップがあるという特徴と併せて，移行過程について次のような仮説を立てることが可能である。

HL 型的な「表層的で融合的」な関係から，より親密で個人的な関係を築こうとする際，まずは HL 型的に「全部わかりあう」親密な関係を求めて関係を持とうとする。しかし，実際に関係を深める過程で，相手を深く知るほど，どうやら相手と全面的に理解しあうことは不可能であることに直面させられる。そこで「人はお互いに別々なのだ」と個別性に気づくことになる。その気づきは一時的に「人は別々でわかり合えないものなのだ」という信念をもたらし，共感性を一時揺り戻させる。ただ，情動・行動面では，その段階においては未だに「わかってほしい」「一体であるべき」と HL 型的な自他融合的な関係を求めている。この段階にあるのが，EさんやFさんの状態ではないだろうか。

その次の段階としては，さらに個人的な関係を築く努力を重ねる上で他者と違う部分と理解できる部分をともに見出だしていくことで，再び共感性が高まり，「人は互いに個別性を有するが，理解・共感できる部分があるのだ」という信念が形成されるようになると思われる。まずはそのような信念が形成され（Mさんはこの段階にあると思われる），それから他の HH 型事例のKさん・Lさんのように情動面での否定的な情動の喚起が抑制されるようになり，行動傾向面も変化していくということが起こるのではないだろうか。

このように，HL 型から HH 型への移行は，まずは信念のレベル（認知のレベル）でおこり，情動面・行動傾向面の移行はその後に起こるという仮説を立てることで，彼ら移行型が，本研究において LH 型・HH 型に分類された理由も説明できる。すなわち，本研究で用いた共感性・個別性尺度は信念のレベルにおいて対人態度を類型化するものであったため，情動面では HL 型に近いが，信念（認知）のレベルでは個別性のある移行型事例が，LH 型や HH 型に分類されたのではないかと考えられるのである。

本研究では，態度を認知・情動・行動傾向の3要素に区分して扱い，3要素間のギャップに着目したことで，非類似の他者への態度が移行期にあると考えられる移行型の態度を記述し，その移行過程について仮説を提出することができた。この仮説モデルについては，今後，移行型も分別可能となるような共感性・個別性の尺度の再考を踏まえ，量的な方法も併せて実証していくことが必要である。

IV．まとめ・今後の課題

本研究では，非類似の他者への態度の個人差を，共感性・個別性という2つの個人特性の組み合わせによって説明することが可能であるかを，面接法を用いて探索した。その結果，これら共感性という「他者との関わりの次元」，個別性という「他者との分離の次元」の2つの次元の組み合わせによって現実に関係のある非類似の他者への態度を描き分けることができ，両特性によって個人差を説明することが可能ではないかという結論を得た。これは，従来の対人魅力の個人差研究に，ひとつの示唆を与える結果であるといえる。

また，態度を認知・情動・行動傾向の3要素に区分し，要素間の関連に着目したことで，非類似の他者への態度の発達的移行についての仮説を得ることができたことも，ひとつの成果であった。

本研究では，これらの問題について，少数事例の分析に基づいて仮説を得たという段階であり，今後はより多くの対象への量的なアプローチも重ねて，これらの知見をより一般化していくことが課題となろう。

（指導教官　下山晴彦助教授）

引用文献

Byrne, D. 1962 Response to attitude similarity-dissimilarity as a function of affiliation need. Journal of Personality, 30, 164-177.

Byrne, D. "The Attraction Paradigm" New York : Academic Press, 1971

Byrne, D. 1992 The transition from controlled laboratory experimentation to less controlled settings : surprise! additional variables are operative. Communication Monographs, 59, 190-198.

Byrne, D. & Clore, G, L. 1967 Effectance Arousal and Attraction. Journal of Personality and Social Psychology Monograph, 6, 1-18.

Glaser, B, G., & Strauss, A, L. "The discovery of grounded Theory" Chicago : Aldine, 1967

Grover, S, L. & Brockner, J. 1989 Empathy and the relationship between attitudinal similarity and attraction. Journal of Research in Personality, 23, 469-479.

中村雅彦 1988 非類似の他者に対する魅力 実験社会心理学研究 第27巻 121-130.

落合良行 1989『青年期における孤独感の構造』風間書房

奥田美奈子 1989 非類似の他者に対する魅力 —Self-Esteem と接触可能性についての考察— グループダイナミックス学会第37回大会発表論文集，105-106.

Olson, J, M. & Zanna, M, P. 1993 Attitudes and attitude change. Annual Review of Psychology, 44, 117-154.

Petty, R, E., Wegener, D, T., Fabriger, L, R. 1997 Attitudes and Attitude Change. Annual Review of Psychology, 48, 609-647.

Shaikh, T. & Kanekar, S. 1993 Attitudinal similarity and affiliation need as determinants of interpersonal attraction. The Journal of Social Psychology, 134, 257-259.

宇留田 麗 1998 類似・非類似の他者に対する態度 —共感性・個別性との関連から— 東京大学大学院教育学研究科修士論文（未刊行）

Wiener, D. 1970 Failure of personality variables to mediate interpesonal attraction. Psychological Reports, 26, 784-786.

謝辞

本稿は，1998年度東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。修士論文執筆にあたり御指導いただきました市川伸一助教授に深く感謝いたします。また，結果の分析に関して，東京大学大学院の坂上裕子さん，菅沼真樹さん，三原理恵さん，小田由美子さんにご協力いただきました。記して感謝いたします。